



Yuta Honda



Shoji Tsutsui



Koji Arihara



Nozomu Kondo



Takahiro Furuki



Keisuke Yamane



Shusaku Sakamoto



Takumi Nakano



Bui Minh Vu



Satoru Kogure



Chinthake Gunatilake



Taichi Yasumoto



Takuma Sugano



Yosuke Kudo



Takashi Narihiro



Katsuyuki Nakano



Yuki Tomotoshi



Yuichiro Wakahara



Yuji Adachi



Tokihiro Miyazaki

技科大の顔

08

2025年 夏号

同窓会と以下の在学生が協力し、制作・配信しています

機械工学系	石黒 仁大
電気・電子情報工学系	内藤 初月
電気・電子情報工学系	久野 優
電気・電子情報工学系	母良田 友
建築・都市システム工学系	末廣 杏月



本田 雄大

Yuta Honda

2013年 機械工学専攻 修了
内山直樹 研究室

1988年 愛知県生まれ
豊田高専 卒業

2013年 古河電気工業株式会社 入社

2020年 株式会社古河電気
アドバンスエンジニアリング 出向

現在 古河電気工業株式会社
ものづくり改革本部設備部生産技術
開発部自動化技術開発課 所属

高校受験で進路に悩んでいた頃に高専の存在を知り、小中の頃から工作や技術・家庭（の技術）が好きだったこともあり、ものづくりの道に進もうと決意して高専へ進学、技科大へ編入しました。内山先生の元で産業機械の制御制御や省エネルギー制御に関する研究を行い、修了後は縁あって実務訓練でもお世話になっていた古河電工へ入社しました。入社後は一貫して設備部隊に所属し、自社の事業部門を相手に既存工程への新規設備導入、既存設備の歩留まり改善、新製品向けの量産設備開発などに携わり、必ずしも学生時代の専攻と配属先が一致しない人もいる中で比較的専攻に近い仕事に携わっています。転機になったのは2020年で、実務訓練時代にお世話になった課長が直属部長を経てグループ会社の社長になっており、もっと古河電工との人事交流を…と思案されていたところ、そこそこ経験があり、かといって年を重ね過ぎていない私に白羽の矢が立てられた形で出向を経験しました。それまでは社内の事業部門が仕事相手でしたが、出向先では社外の顧客にも設備を納めていたため、ある案件ではシビアな評価をされたり、ある案件では他社がどこもやれなかった工程を実現して自社の自信に繋がったりと、自分達の技術が社内ではなく世の中と比べてどのレベルなのか、井の中の蛙になっていないかと思つて直すきっかけになりました。現在は古河電工に戻り、気付けば勤続年数も10年を超え、グループリーダーとして後輩をまとめて課長を補佐する立場になり、若手社員の新技術への感度やセンスの高さに負けないよう奮闘する日々です。昨今は社会の変化の速度が飛躍的に高まっていますが、工学部としての抛り所たる新技術を大切に、是非それを社会に役立ててほしいと思います。



有原 浩二

Koji Arihara

1995年 エネルギー工学専攻 修了
関東康祐 研究室

1972年 広島県生まれ
呉高専 卒業

1995年 富士機工株式会社 入社
現:株式会社ジェイテクトシステム

現在 同社 技術管理部
CAD/CAEグループ グループ長

1991年、高専4年のとき、同じ呉高専・機械科卒の兄から「大学へ行け」と言われたことが、私の人生の転機となりました。バブルの余韻が残る時代の中、「ダメなら就職すればいいか」と軽い気持ちで編入試験を受け、運よくエネルギー工学系に合格。破壊力学研究室に所属し、CAEの研究を横目で見ながら、少しだけその世界を学びました。

しかし、1995年の卒業時にはバブルは崩壊。地元での就職は叶わず、豊橋の隣にある湖西市の富士機工株式会社に入社しました。ステアリングコラムという壊れ方が重要な自動車部品の量産開発をはじめ、新規開発、CAE解析、商品企画など、多岐にわたる開発業務を経験してきました。そして今、研究室時代の経験が縁となり、解析担当部署を率いる立場となっています。

学生時代を振り返ると、ロボコン同好会での活動が最も心に残っています。前号寄稿の櫻山さん達と共にロボコンに出場後、ロボコン同好会を設立しました。

2度目の4年生として迎えた94年、念願の初優勝。そして、その後は後輩の皆さんが9度の日本一という快挙を達成。華々しい優勝の裏には、敗北の悔しさを積み重ねた努力の歴史があり、そこに築かれた人との縁が今の成果につながっています。この歴史をさらに発展して頂いた後輩の皆さんを心から誇りに思います。

この成果は、大学、同窓会、そして企業の皆様のご支援頂いた貴重なご縁があってこそ。深く感謝申し上げます。最近では、同窓会総会での大会結果の報告、前同窓会長の古野さんにお声掛けいただき、4社合同雲雀会でも報告の機会を頂きました。このご縁と絆をさらに深め、これまでに頂いたご恩に報いるためにも、これからも後輩たちの支援を続けていきたいと思っています。



筒井 勝児

Shoji Tsutsui

2001年 機械システム工学専攻 修了
畔上秀幸 研究室

1976年 山口県生まれ
大島商船高専 卒業

2001年 株式会社トヨタコミュニケーションシステム 入社

2006年 トヨタテクニカルディベロップメント
株式会社 再編

2016年 トヨタ自動車株式会社 再編・承継

現在 同社 計測・デジタル基盤改革部

大島商船高専から3年次編入し、研究室配属前に実施された説明会、今思えばこの時が私の人生の大きな転換期だったように思えます。そこで見たものは畔上先生の研究室によるサスペンションアームなどの形状最適化解析の事例で、私にとって初めて「CAE (Computer Aided Engineering)」という分野の存在を知ることとなりました。20数年経った今ではごくありふれたものですが、高専時代に材力の公式をひたすら覚えて机上計算していたことにトラウマを覚えていた当時の自分にとっては、コンピュータを活用して工業製品の性能をシミュレーションし、最適形を導き出すという手法に大きな衝撃を受けました。目に見えない力や動きを“見える化”して開発に活かすというポテンシャルの高さに、強く心を動かされたことを今でも覚えています。

研究室では畔上先生を筆頭とした個性的な先輩方に恵まれて技術の可能性と楽しさを学び、大学院修了後はCAEの分野で仕事を続けてきました。現在は電動車両用の大型バッテリーの開発に携わっており、日々変化する市場のニーズに応えるべく、多様な解析技術に取り組んでいます。技術の変遷は激しいものがありますし、技術運用する上での政治的な話も意外とあって頭の痛い話も多いですが、今でもモチベーション高く向き合っているのは、あのときの感動をより多くの方々に伝えたいという想いがあるからなのかもしれません。

在学生の皆様におかれましては、限られた大学生活の時間の中ではありますが、ぜひ多くのことに興味を持って関わってください。そして皆さんの人生にとってかけがえのない出会いや経験が得られることを、心より願っています。



近藤 望

Nozomu Kondo

1988年 生産システム工学専攻 修了
中村雅勇 研究室

1963年 愛知県生まれ
愛知県立国府高等学校 卒業

1988年 ミノルタカメラ株式会社 入社

2019年 コニカミノルタ 製品開発センター長

現在 同センター シニアスタッフ

62歳の現在までずっと草野球を続け、母校国府高校野球部OBとしてマスターズ甲子園大会に参加し甲子園のグラウンドに立つこともできました。ショートから見上げた銀傘は感動的でした。皆さんもお忙しいとは思いますが好きな事、できれば身体を動かすことを少しずつでも続けること、おすすめします。

さて本業ですが、複写機、複合機の開発設計をしてきました。「最近使っていないあ」と言われる、そのコピー機です。自動車のような華やかさはありませんが多様な技術の集合体で自動車と同じくすり合わせ型製品の代表です。自分が携わってきた時代は複合機がアナログからデジタル、モノクロからカラー、低速から高速と大きく進化し続ける時代でした。常に新しい課題があり、それに組み続けることができたことは技術者として非常に幸運でした。

仕事を進める中で役に立ったのは、研究に当たり指導を頂きながら進めた実験装置や試料作製、それを使った実験や考察の経験でした。図面を引き、工作センターで油にまみれながら旋盤を回し、オペアンプに抵抗を組み合わせながら回路を作り、油圧アクチュエータを組み込んで疲労試験機を作った経験、銅材や薬剤を調達し、圧延や切削、研磨をしながら試料を作った経験です。また実験を進めるうえでは、本質に目を向けながら工夫すること、細心の注意を払いながら繰り返すことではじめて上手く行くようになることも学びました。

社会に出て対象は研究から複合機開発設計に変わりましたが、加工や生産現場のこと、エレキハードや制御など専門以外の様々なことを浅くとも広く知ること、本質に目を向けながら工夫し続けることを大切にしてきました。製品化全体を推進する立場で仕事してこられたのは、このおかげだと思っています。



古木 崇裕

Takahiro Furuhi

2018年 電気・電子情報工学専攻 修了
福田光男 研究室

1993年 静岡県生まれ
沼津高専 卒業

2013年 浜松ホトニクス株式会社 入社
現在 同社 固体デザインセンター
サブリーダー

2014年に沼津高専の制御情報工学科から豊橋技術科学大学の電気・電子情報工学課程に編入学しました。特別推薦による編入学だったこともあり、短期海外研修に参加させていただいたり、学長からの特別講座を受講させていただいたりと貴重な経験を行うことができました。これらの経験は現在仕事を行う中で、リーダーシップやチャレンジ精神として活かされていると感じています。学生時代の研究室では、福田光男先生のもと、表面プラズモンデバイスに関する研究に取り組みました。先生や先輩、仲間の助けのおかげでポーランドにて開催された国際学会において発表賞を受賞できたことが誇りであり、今でも周囲のサポートに感謝しております。

浜松ホトニクスでは、フォトダイオードをはじめ、CCDセンサ、CMOSセンサなどの半導体センサを制御するための駆動回路の設計やソフトウェアの設計をしています。センサ単体だけではなく駆動回路をお客様へ提供することによって、お客様がセンサを使いやすくする、また測定精度や測定速度を向上させるなど、付加価値を提供することで会社売上げに貢献することを日々目標に仕事に励んでいます。最近では、プロジェクトリーダーとして他のメンバーの進捗管理をすることも多くなっています。試行錯誤の日々ですが、やりがいを持って楽しく仕事をしています。

社会に出て一番強く感じているのが、一人で行えることには限界があるということです。周りのサポートに感謝すること、様々な人とコミュニケーションをとることを心掛けて、大学生活を送ってください。社会人になったときに自分や周囲の成長につながると 생각합니다。



坂元 周作

Shusaku Sakamoto

2004年 電子・情報工学専攻 修了
太田昭男 研究室

1976年 兵庫県生まれ
豊田高専 卒業

2004年 木更津工業高等専門学校
電子制御工学科 助手

現在 同校 電子制御工学科 准教授

中学のときに超伝導に衝撃を受け、色々調べて高専で学べるらしいと知って豊田高専に入学。卒研で超伝導の研究をしたものの飽き足らず、さらに超伝導について学びたいと思い、高専研究室の恩師も学んだ豊橋技術科学大学に編入学を目指して猛勉強し、合格できたのは30年近く前のことになります。

編入学後は太田先生の元で超伝導の研究について邁進し、実験装置の製作から超伝導線材の製作、測定、ゼミ、研究発表などさまざまな経験を積ませていただきました。中でも超伝導マグネットと液体ヘリウムを使用する実験は一大イベントで、3交代24時間体制で実験したのは今でも大学時代の大事な思い出の一つです。また、超伝導体は製作や計測に時間がかかることが多く、いかに時間を有効活用するかなども試行錯誤の毎日。研究以外の面でも多くの学びを得ることができ、中身の濃い充実した大学生活を送れていたと思います。

ゼミなどで後輩に指導することにやりがいを感じ、また高専や技科大に恩返しをしたいとの思いから多くのエンジニアを世に送り出すべく高専の教員になることを決意。現在の木更津高専で教員として採用されてもう20年以上が過ぎました。教員になってからも時代と共に変わる社会情勢や学生の質など今までの経験を活かしつつも試行錯誤を繰り返して対応していたらあつという間に50歳に手が届きそうなところまで来てしまいました。正に光陰矢のごとし。

教員となって多くの卒業生を送り出し、そのうち幾人かは技科大に編入学して自分の後輩になったりするなど、自分なりに高専と技科大に多少は貢献できているのではないかと考えています。人生はまだまだ続くので、今後も社会に貢献できるエンジニアの卵達を孵化させるべく奮闘予定です。



山根 啓輔

Keisuke Yamane

2011年 電子・情報工学専攻 修了
若原昭浩 研究室

1983年 岡山県生まれ
津山高専 卒業

2011年 山口大学工学部 助教

2014年 豊橋技術科学大学
大学院工学研究科 助教

2022年 同上 准教授
現在に至る

私は博士課程を修了後、山口大学で教員として社会人生活をはじめ、2014年からは母校の豊橋技科大に異動して現在に至ります。そして2022年からは研究室を持つことになり、現在では第3期生までが集う、にぎやかで頼もしいチームの中にいます。

研究室のスローガンとして「結晶化技術で世界を変える」ということを掲げ、挑戦的なテーマ、一発当たったら世界が変わるようなテーマに目を向けるようにしています (<https://researchmap.jp/kyr>)。現在は、半導体からの放射光を用いた宇宙用発電デバイスや、集積回路に自在に組み込める赤外光源材料の開拓をテーマに、(まだ何も成果は出ていませんが...)研究室の学生と日々悪戦苦闘しています。残りの教員生活、推定100名を超える学生たちを送り出して退職する日まで、この姿勢で進められたらと思っています。

私には退職するときになえたい夢があります。それは、定年退職を迎えたそのときに、これまで巣立っていった卒業生を一堂に集めた、盛大な同窓会を開くことです。できることなら、修了生が社会で活躍し、心と生活に余裕を持った立派な社会人となって、厚志を寄せ合い、または、研究で一発当てた特許収入などを原資に、盛大な同窓会を開催できればと思っています。万一そのような状況がかなわない場合は、私の指導力不足ですので、責任を取って私が修了生をおもてなししたいと思います。その覚悟と共に、研究と教育を愉しんでいきたいと思っています。



仲野 巧

Takumi Nakano

1982年 情報工学専攻 修了
楠・飯田 研究室

1957年 福井県生まれ
福井高専 卒業

1982年 富士通株式会社 入社

1989年 豊田工業高等専門学校 講師

2023年 豊田工業高等専門学校
定年退官 名誉教授

現在 有限会社 シリコン・システムズ
代表取締役

私は、1期生として入学し、何もないゼロからの「ものづく(創)り」を経験したことで、その後の人生でも常に新しいことにチャレンジしてきました。

大学では、32bitの可変バス構成型コンピュータを設計し、ワイヤーラッピングで試作しました(未完成のまま修了し、後輩が稼働させてくれました)。

富士通では、端末(ATM)部門で、マルチポート通信回線のPLD基板やゲートアレイの設計、C言語によるリアルタイム(RT)OSの移植や通信ソフトの設計、さらに振込用の全国銀行・支店データベース(特許)を大型計算機でFDD(1Mbyte)に編集して初めて郵政省に納入したなど、全てがゼロからの開発でした。

高専に転職後は、新設の情報工学科のため、ハードウェアからソフトウェアまでの講義を担当しながら毎週の工学実験のテーマ作成などで日々奔走していました。そして、大学や会社での経験を生かして、ハードウェアの講義で実践的な設計と演習を行うために、ハードウェア記述言語(HDL)のシミュレータを添付した初めての書籍を出版し、演習を行いながらハードウェアが実装できるFPGAボードを試作して販売する会社を兼業で設立しました。さらに、東京大学の大規模集積システム設計教育研究センター(VDEC)のパイロットプロジェクトでVHDLからLSIを設計し、研究でRTOSのLSIチップを実現したことによりIPアワードで最優秀賞が受賞でき、これらの研究の論文で博士号が取得できました。その後、最新技術である32bit MIPSコンピュータの命令からVHDLによる設計、さらにパイプライン化への拡張までの書籍を出版して、ついに大学時代からのコンピュータが最先端技術で実装まで完成させることができました。

現在は、ITとドローンを活用した狩猟などにチャレンジしています。



ブイミンブー

Bui Minh Vu

2021年 情報・知能工学専攻 修了
中内茂樹 研究室

1992年 ベトナム ハノイ生まれ
HUS High School for Gifted Students 卒業

2021年 株式会社モルフォ 入社

2024年 三菱電機株式会社 入社

2024年 三菱電機モビリティ株式会社 出向

現 在 同社 Safety&Comfort システム ビジネス
ユニット センシング機器製造部

高校卒業後、日本での留学を目標に掲げ、豊橋技術科学大学へ入学し、学部1年から博士課程修了まで、9年間にわたり在籍しました。中内研究室およびリーディングプログラムでは、研究活動を通じ視覚科学、認知科学、脳科学などの専門知識を習得することができました。また、海外の企業や研究機関と交流する機会が多く、貴重な経験を積みながら成長することもできました。

博士課程を修了後、モルフォ株式会社に入社し、ソフトウェアエンジニアとしてのキャリアをスタートしました。画像処理をはじめ、機械学習、自動運転など技術革新の最前線で開発業務に従事しながら、自らのスキルを磨くことができました。昨年、新たな挑戦を求めて三菱電機株式会社へ転職し、転職と同時に三菱電機モビリティ株式会社へ出向となり、ドライバーモニタリングシステム（DMS）のセンシング開発を担当しています。さらに最近では、海外の取引先との業務も一部担当するようになり、これまでの研究活動や前職で得た知識や技術を活かし、多忙な日々を送っています。

社会人になり、これまでの研究活動と実際の製品開発との間に存在する大きな違いを実感しています。実験環境では高精度でも、一般的な環境では活用が難しい技術が多くありました。また、製品開発の過程では常に開発の最適化や品質向上に向けた取り組みが求められていました。理論のみにとどまらず、市場のニーズを的確に捉え、実際の製品として形にする難しさに直面することで、より柔軟な発想と実践的なエンジニアリングスキルの向上につながったと思っています。学生の皆さんも新しい挑戦を恐れず、一歩ずつ前進することで、より良い未来につながるはずです。



グナティラカチンタカ

Chinthake Gunatilake

1999年 情報工学専攻 修了
宮崎保光 研究室

1971年 スリランカ コロンボ生まれ
呉高専 卒業

1999年 富士通 入社

2022年 富士通(株)Digital Solution事業本部
シニアディレクター

2023年 富士通(株)ソーシャルソリューション事業本部
シニアディレクター

現 在 富士通(株)ネットワークビジネスフロント本部
シニアディレクター

1991年4月に日本の国費留学生として『光り輝く国』スリランカから19歳で来日、半年間、東京の日本語学校で日本語を学び、広島の実高専の電気工学科の3年に編入、その後、技科大の情報工学課程の3年に編入、学部卒業後に1999年3月に修士課程を終了しました。技科大在学中に大学祭や留学生同士の様々なイベントに企画、豊橋国際交流協会の国際交流事業の一環で数多くの小中学校やPTAを訪問、豊橋祭りや大名行列等の地域活動にも欠かさず参加、在学中の最後の豊橋市民の日に一日議長を務めさせていただきました。そして、学部卒業と同時にロータリー米山記念奨学金への合格をきっかけに修士課程2年間、豊橋ゴールデンロータリークラブの皆様と多くの社会活動に取り組むことができました。1999年4月に富士通に入社、グローバル市場において各国を代表するお客様を相手に光・海底・無線・モバイルなどの社会のライフラインを支える技術や生体認証やAIを活用した人間の行動予測などの日本が誇る最先端技術のグローバル展開を担い、今は新規市場獲得のためグローバルビジネスデベロップメントに励んでおります。入社以来26年間、40ヵ国以上のプロジェクト関わったこと、仕事を通じて全大陸を制覇できたこと、なかでもヨーロッパから中近東・アフリカを経由し、アジアまでの20ヵ国以上を繋ぐ海底通信網の実現に関わったことが一番の誇りです。その傍らで、生まれ故郷のスリランカと大好きな日本を人・文化・経済的に繋ぐ個人活動も継続中です。その一環で、豊橋の仲間の協力を元に4月に豊橋を代表する企業を訪問、スリランカとの橋渡しを始めたばかり。多くの国々の留学生を世の中に送り出した技科大のある豊橋の街を世界中で輝かせたいです。



小暮 悟

Satoru Kogure

2002年 電子・情報工学専攻 修了(博士課程)
中川聖一 研究室

1974年 福島県生まれ
宮城高専 卒業

2002年 豊橋技術開学大学 研究支援職員
愛知教育大学 教育学部
情報教育講座 助手

2004年 静岡大学 情報学部 情報科学科 助手
現 在 静岡大学 情報学部 情報科学科 教授

宮城高専（現在の仙台高専）の電気工学科を卒業後、コンピュータ関係の学習・研究を目的として豊橋技術科学大学工学部情報工学課程の3年次に編入しました。中川聖一先生の研究室で音声対話システムの研究を6年間しておりました。研究をする中で香港やデンマーク、チェコなどの国際会議で発表・聴講をする貴重な経験をしました。チェコでの国際会議参加の真っ只中アメリカで同時多発テロが起きたことを覚えています。厳しく丁寧な指導の元無事に3年で博士（工学）を取得しましたが私自身の実力不足により大学・企業への就職に失敗し研究員で雇っていただき6ヶ月研究室に残りました。

2002年10月に機会を与えられ愛知教育大学教育学部に助手として着任し、学生への情報教育の場を与えていただきました。2004年7月に研究室の先輩経由にて静岡大学情報学部を紹介いただき助手として異動・着任しました。静岡大学情報学部では、教育学部での情報教育の経験も踏まえつつ、プログラミング学習支援および第二言語学習支援の研究を進めています。

2004年7月より浜松に引っ越しをしたあと現在まで浜松に住んでおりますが、浜松は全国でも有数の「雪がふらない」地域でもあります。福島県出身のため子供の頃は非常に馴染みのある雪が少し恋しいです。ただ地域性の観点から車がないと不便でありその点では雪が少ないのは助かってもらいます。

技科大の研究室で過ごした6年と6ヶ月で得た経験は現在の授業・委員会運営・研究室運営に非常に役立っていると実感しているところです。在校生の皆様、生成AI等の最新の技術にも積極的に手を出しつつ研究室での活動を楽しんでください。その経験はきっと今後の人生で役に立つ経験になるでしょう。



安本 太一

Taichi Yasumoto

1990年 情報工学専攻 修了
湯浅太一 研究室

1966年 静岡県生まれ
詫間電波高専 卒業

1990年 愛知教育大学 助手

1995年 豊橋技術科学大学 後期博士課程
電子・情報工学専攻 入学

1997年 愛知教育大学 助教授/准教授

1998年 豊橋技術科学大学 後期博士課程
電子・情報工学専攻 修了 博士(工学)

2019年 愛知教育大学 教授 現在に至る

情報工学専攻修了後、刈谷市にある愛知教育大学の総合科学課程の助手に採用されました。総合科学課程は、教員就職が厳しい当時の状況下で、教員免許を取らなくても卒業できる民間企業等向けの人材育成を目的とした課程です。

情報工学が専門の教員は、教育学部では、どちらかというと傍流だったのですが、2003年度から高校で情報必修となり、高校情報の教員免許ができ、2022年度には小中高の全てでプログラミング必修となり、2025年の共通テストでは情報が加わるなど状況が変わってきました。その中で、私は、高校情報の教員免許取得のための授業や、学校の先生を対象としたプログラミングの研修などを担当してきました。研修の講師では限られた時間に必要内容を精選しておさめることに苦労しましたが、修士課程と博士課程でプログラミング言語処理系に関わる研究をしたことが役に立ちました。このほか、職場の愛知教育大学のインターネット接続に実験段階から従事しましたが、修士課程のときに豊橋技科大のネットワーク環境が整備されていくのを経験していたのが役立ちました。日本のインターネットは、大学間のネットワーク接続の実験から始まり、民間企業などのインターネット接続が後に続き、今日に至っています。微力ではありましたが、日本のインターネットの構築に関わって良かったです。

これまで仕事で壁にぶつかったことが何度ありましたが、豊橋技科大で学んだことを活かしたり、あきらめずに頑張ったり、継続していたことが実を結んだり、躊躇せず人に助けを求めたりして、乗り切ってきました。趣味でマラソンをやっている忍耐強くなっていたのも役に立ったのかもしれませんが。

最後に、豊橋技科大の益々のご発展と皆様のご活躍をお祈りします。



菅野 卓馬

Takuma Sugano

2014年 環境・生命工学専攻 修了
水野彰・高島和則 研究室

1989年 北海道生まれ
釧路高専 卒業

2014年 三浦工業株式会社 入社
現 在 同社 アクアシステム設計部 所属

高専在学時は電気・電子工学を専攻しており、量子力学などミクロな世界の学問に関心を持っていましたが、ある企業の新興国への水事情貢献を特集したTV番組を見たことをきっかけに水処理に関わる仕事をしたいと思い、エコロジー工学課程に編入することを決めました。水処理に関わりたと思ったきっかけとは違う形にはなりましたが、主力事業がボイラである三浦工業で入社当時より水処理に関わる仕事に従事できており、日々退屈のしない毎日を送っております。

技科大に編入した当初はそれまで専門としてなかった科目に苦勞することも多くありましたが、親しくしていた友人とアパートに集まり各々の得意科目を教えあいながらテストを乗り越えたことはとても良い思い出として残っています。また、研究室配属後は水野・高島研では主流のテーマではありませんでしたが水処理の研究を担当することもできました。学部生時代には国際学会へ参加する機会を与えていただき、発表の前には緊張に押しつぶされそうにもなりましたが、あの時の緊張を超える経験は社会人になって10年以上が経過した今もほとんどなく、緊張することがあっても「あの時ほどではない」と考えることで心の平静を取り戻すことができる良い経験を得ることができました。

最後に、技科大の顔を執筆する機会を与えていただいたことに感謝いたします。大学時代のことを思い出す良い樹会となり、大変なこともありましたが楽しかった日々を懐かしく振り返ることができました。また、在校生の皆さんにおかれましてはそれぞれの場所で素晴らしい活躍をされることを遠い愛媛の地より心から願っています。



成廣 隆

Takashi Narihiro

2005年 環境・生命工学専攻 修了
平石明・二又裕之 研究室

1977年 千葉県生まれ
木更津高専 卒業

2005年 (独)産業技術総合研究所 博士研究員
2008年 同上 特許生物寄託センター 研究員
2013年 同上 生物プロセス研究部門 主任研究員(2015年より国立研究開発法人)
2020年 (国研)産業技術総合研究所
生物プロセス研究部門 研究グループ長
現 在 同上 バイオものづくり研究センター
微生物生態工学研究チーム 研究チーム長

木更津高専の電子制御工学科を卒業後、なぜか生物への興味が沸き当時のエコロジー工学課程へ3年次編入し、4年次から在籍した平石明・二又裕之研究室で博士課程修了までの7年間、当時流行した生分解式生ごみ処理機の中に棲む微生物叢の研究を行いました。実験、解析、論文執筆に至るまで、いずれも一筋縄ではゆかず試行錯誤の連続でしたが、周囲の方々の支えもあり無事に学位を取得することができました。学位取得時に平石先生から「サイエンスの世界において博士号は普通自動車免許証のようなもので、これからどこに向かうかはあなた次第」という叱咤激励をいただいたことを今でもたまに思い出します。行き先を自由に選べるほどの業績はもちろんなく、ある学会で立ち話をしたことがきっかけで産業技術総合研究所の研究者に誘っていただきポスドクの機会を得ました。その後、常勤職に恵まれ今に至ります。産総研は約2,300人の研究員が在籍する国内最大級の研究機関です。研究対象分野も幅広く、皆さんが参加されている学会で産総研の研究者に出会うことがあるかもしれません。もし国研での就職に興味があれば勇気を出して声をかけてみてください。その一歩があなたの進み道を大きく左右することになるかもしれません。私は今、私よりも一回りほど若い世代の研究者たちと一緒に、資源・環境制約への対応策として注目されている生物学的廃水処理プロセスの微生物叢に関する研究に携わっていますが、自分自身で手を動かして実験や解析を行うフェーズから、若手研究者から刺激を受けつつ私自身の経験を還元していくフェーズへと移行しつつあるのを日々感じています。彼ら彼女らよりさらに一回り若い在学生の皆さんが、これからどのような道へ進んでいくのか楽しみにしています。



工藤 陽輔

Yosuke Kudo

2007年 工学工学専攻 修了
角田範義 研究室

1982年 静岡県生まれ
沼津工業高等学校 卒業

2008年 株式会社キャタラー 入社
2015年 農業研修スタート
2017年 OBUSE Meguru Lab. 独立就農
現在に至る

この度、このような機会をいただき、感謝いたします。在学中、6年間所属したラグビー部で、メンバーと苦楽を共にした実りの多い時間は一生の宝物です。何よりも、今の私があるのは、ラグビー部の同期だった友人の存在ゆえであると言えます。就職後、在学中に所属していた研究室と共同研究をさせてもらい、とても有意義な日々を過ごしていました。ところが、長野県小布施町で有機農業をしていたその友人を介して食と農の重要性を知り、その魅力に惹き込まれていきました。これが決定的な転機となり、30歳を過ぎたころには、会社を辞めて農業に挑戦することを決意。その際、大変お世話になった角田範義先生にも背中を押していただいたことを、今も鮮明に覚えております。現在は、『OBUSE Meguru Lab.』（ぜひHPをご覧ください）という屋号で微生物農法を実践中。これは、畑の農産物から採取した菌を発酵培養し畑に戻すことで、菌たちの活躍によりおいしい農産物が育つというものです。環境に配慮しながら、りんごや桃、野菜等を栽培しつつ、一般向けの家庭菜園教室を主催し、さらに農業体験や畑での社会人研修の受け入れ等も行っています。農学部こそ出していないものの、技科大・会社員時代の研究経験は私の大きな強みの1つ。生産に追われながらも、ちょっとした実験等、日々遊び心をもって取り組んでいます。自らの意思でやりたいことができる幸せをかみしめながら、私の在学中にはなかった農業の分野も加わった現在の技科大と新たに関わりをもてたらと心の隅で思うこの頃です。在校生のみなさん、友人や先生、バイト先の方など、大学生活における出会いや人との縁をどうぞ大切にしてください。先々の人生で、想像もしなかったことが起こるかもしれません!!



中野 勝行

Katsuyuki Nakano

2002年 エコロジー工学専攻 修了
金照濬 研究室

1976年 三重県生まれ
鈴鹿高専 卒業

2000年 有限会社エルシイエ応用技研 代表取締役
2003年 産業環境管理協会 LCA事業室
2017年 産業環境管理協会 LCA事業室 室長
2018年 立命館大学 政策科学部 准教授
現 在 同上 教授

気が付いたら大学で学生に教育する立場になっていました。大学教員になって8年目ですが、まだ慣れないことが多々あります。例えば大学には真面目でおとなしい学生もいれば、ヤンチャで生意気な学生もいて、接し方に苦勞します。今のご時世、ちょっとしたことでやれアカハラだなんだと言われてしまいます。「そんなんじゃ卒業無理だね」なんて言おうものなら、即ハラスメント相談室から呼び出しがあるでしょう。ただ思い起こすと自分はもっと生意気で、扱いの難しい学生だったと今更ながらに反省します。技科大の先生方は本当に困っていたでしょうが、やさしく、時には厳しく指導して頂きました。特に、指導教官の金照濬先生には修士1年生だったころに起業した会社を支援して頂きました。就職氷河期の真っ只中でしたが、おかげさまで大好きなライフサイクルアセスメント(LCA)の調査研究を修士修了後もその会社で続けることができました。故・大竹一友先生にLCAを教えて頂いたことも忘れられません。学部3年という研究室配属前にも関わらず、当時の最新のLCA研究やソフトに触れる機会を頂きました。その結果もあり、LCAの仕事を続けることができて、今は大学で自由にLCAの研究ができる立場になりました。

大学教員になってわかったのは、はっきり言って何もしないほうが楽だということです。授業も学生指導も適当にして、好きな研究を好きなようにしていても給料は変わりません。なのに、技科大の先生方は何時間もディスカッションに付き合ってください、また言いにくいことも言ってくださいました。本当に感謝しかありません。自分も少しでもそうあるよう、努力したいと思います。(でもハラスメント相談室からの呼び出しは怖い・・・)



友利 祐樹

Yuki Tomotoshi

2007年 建設工学専攻 修了
松島史朗 研究室

1983年 山口県生まれ
下松高等学校 卒業

2008年 株式会社ZAI 入社

2010年 株式会社ジオクリエイツ
非常勤として勤務

現 在 アーティストトモシ

現在の僕は「アーティスト」として活動しています。なかなかうさんくさい肩書きですね。大学時代は「新しい建築の形を生み出したい!」と意気込む真面目な学生でした(意匠設計以外の試験は一夜漬けで乗り切ってた記憶もあります)。ともかく、自由にやらせてくれた松島研には感謝しています。

卒業後は東京の設計事務所で建築設計に関わりました。ただ、現実はなかなか思い通りにはいきません。今考えたら当たり前ですが、設計はお客さんあっての商売です。設計者のやりたいようにできる現場なんてそうそうありません。与えられた条件のなかで面白さを見出す優秀な建築家の方もいますが、自分にはその能力はありませんでした。さらに、人口減少の国でマンションが建ち、CO₂を出し続けている現実にも疑問を持ち始めていました。

モヤモヤしていたある日、転機が訪れました。Chim↑Pomという集団との出会いです。彼らは既存の都市に強いインパクトを与える表現を仕掛け、そこに生きる人たちとの新たなコミュニケーションを発生させていました。自分がやりたいのはこういうことかもしれないと思いました。彼らが名乗っていたアーティストという肩書きに可能性を感じたのも、このときが初めてでした。以来、僕はデザイナーであることをあきらめ、アーティストとして都市や建築に向き合うことになりました。そしてすでにある都市空間を再解釈し、新しい都市の使い方を提案する活動を続けています。

学生時代に思い描いていた、建築設計という職を断念したのは事実です。でも、別のアプローチで建築や都市に向き合っているという自負もあります。今日も都市や建築を使う人のことを考え続けています。



足立 有史

Yuji Adachi

1994年 建設工学専攻 修了
河邑眞 研究室

1969年 鳥根県生まれ
松江高専 卒業

1994年(株)間組 入社

2013年(株)安藤・間 社名変更

現 在 (株)安藤・間 技術研究所
研究開発推進部長

皆様、こんにちは。私は13期生として1990年に松江高専から3年次に編入し、1994年に建設工学専攻を修了しました。現在は建設会社(ゼネコン)の安藤ハザマに勤務しています。社会人になり31年が経ちました。これまで土木系の施工管理や設計部門を経験しました。特に、2011年からの東日本大震災からの復興では多くの関係者の皆様と協力をさせていただき、技術者として貴重な経験をさせていただきました。現在は技術研究所において全社の技術開発の推進を担当しています。36歳の時、河邑眞先生、三浦均也先生の後押しをいただき、技科大の社会人博士課程に3年間お世話になり、学位を取得することができました。入社当時は、主に建設プロジェクトの効率化や品質向上が求められていましたが、現在では働き手不足や環境問題、社会インフラの維持、DX活用など、社会ニーズや課題が大きく変化しています。これらの新たな課題に対応するため、技術の進化が益々重要になっています。振り返ってみると、技術を扱う私にとって技科大で学んだことはもちろんですが、先生や同窓生との人脈は本当に頼りになる存在でした。これから社会に出られる学生の皆さんにお伝えしたいのは、技科大での時間や人間関係は将来の大きな財産になるということです。先生、仲間との関係を大切に、新しいことに挑戦し続けて成長していただくことを心から願っています。



若原 雄一朗

Yuichiro Wakahara

2000年 建設工学専攻 修了
河邑眞 研究室

1975年 岐阜県生まれ
岐阜高専 卒業

2000年 大日コンサルタント株式会社 入社

2022年 同社 執行役員イノベーション推進事業部長

2023年 (同社業務)アトレファームジャパン株式会社 代表取締役社長

現 在 同社 取締役ソーシャルデザイン部 署長
(同社業務)アトレファームジャパン株式会社 代表取締役社長

2000年の超氷河期時代に大学院修了後、出身地に本社のある大日コンサルタント(株)(建設コンサルタント)に就職しました。就職後は仕事の傍ら、学生時代の研究テーマであった衛星画像解析を出身研究室の河邑研究室や、同研究室出身の先輩が在籍する福井高専辻子研究室・辻野研究室との共同研究等のアカデミックな係わりなど、全力で学び続けた20代でした。

入社後は公共事業の環境アセスメント等の建設環境分野を専門に従事し、入社7年目の31歳で技術士(建設部門)資格を取得しました。技術士取得が自身の成長エンジンとなり管理技術者として業務に携わり、コンサルタント技術者として基礎固めができた実感しています。

入社19年目(2018年)の43歳には、入社後の共同研究や業務経験を評価頂き、新規ビジネスを推進するイノベーション推進準備室(当時)の初代室長に任命され、新規ビジネスの戦略立案を主導しました。新規ビジネスの具体例として、2019年12月に過疎地域である岐阜県山県市にエリアマネジメント型の地域活性化(まちづくり)を目指す新会社「アトレファームジャパン(株)」を設立し、2021年2月に「体験農園みとか/mitocafe&Market」を開業させ、2023年2月には同社の代表取締役役に就任しました。現在は、同社の代表取締役と大日コンサルタント(株)の取締役を兼務し、学び・考え続ける日常を過ごしています。振り返ると、大学院修了後は様々な人に出会い、人に成長をさせて頂きました。人との出会いこそが私の原動力でした。今後も人との出会いを大切に、自身が後輩たちをはじめ関係する人に力や幸せを与えられるよう日々精進していきます。



宮崎 時弘

Tokihiro Miyazaki

1988年 建設工学課程 卒業
瀬口哲夫 研究室

1965年 兵庫県生まれ
明石高専 卒業

1988年 株式会社坂倉建築研究所 入社

2007年 株式会社プランテック総合計画事務所 入社

2010年 ナチュラル・カンパニー一級建築士事務所 入社

2011年 株式会社伊藤喜三郎建築研究所 入社

現 在 クリアスケープデザイン 代表

明石高専の17歳の時、担当の先生に学ぶ中で建築家という職業を意識し始めていました。そんな頃全国学生卒業設計集という本の中に前川国男から学生に向けたこんなメッセージがありました。「卒業設計は文化の食い荒らしだ!」・・・とあり、えっ!とこれにはかなり驚きました。当時この「文化」が何のことを言っているのか分からず何人かの先生にも聞いて廻ったことを思い出します。そんな私も還暦になり様々な経験を通してながしかの「文化」的意味とは何か自分なりに答えを出すようになったかなと感じます。坂倉建築研究所から始まり4つの異なったタイプの建築設計事務所勤務の中で個人住宅から、オフィスビル、音楽ホール、図書館、体育館、百貨店、病院等、様々なタイプの建築設計・監理を行ってきました。クライアントからの要望～設計者から社会への提案・回答を・・・建築という形で私なりに「文化」を試行錯誤してきた様に思います。現在はフリーで事業所(設計事務所)の体を整えています。設計者という立場からは少し離れて建築を中心とした課題解決のサポートを行うPM、CMの立ち位置で業務をしています。今、建築家像は不明確になり建築を取巻く社会の要請も大きく変化してきています。ザックリ言うと学生の頃の個性的で主張が強い派手な建築は没個性的でリアルなコストが高い建築に変化してきています。これは良い悪いではなく時代(文化)が要請した結果によるものです。ただ私自身この変化を手放しで了解してるというわけではなく、少し違うのではないかなと思う部分も多々あります。今後も立ち位置は変わってもこれまで考えてきたことを様々な機会に提案し、昨日より今日は少しは良くなったと思える文化(時代)の実現に微力ながら協力していきたいと考えています。